慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	高校が取り組む探究型プログラムに参加して考えたこと： 高山西高等学校の「探究飛騨」に関係した事例より
Sub Title	From the experience of participating in a high school research program
Author	長田, 進(Osada, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学 (The Keio University Hiyoshi review of social science). No.31 (2020.) ,p.27- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10425830-20210331-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／This content is protected by the Japanese Copyright Act

高校が取り組む探究型プログラムに参加して考えたこと
――高山西高等学校の「探究飛騨」に関係した事例より――

長　田　　　進

1．はじめに

21世紀に入ってから，教育機関に求められる役割は広がりを見せている。これは，生涯学習の視点からこれからの教育機関の在り方を問いかける傾向の中に理解される。例えば，2006年の教育基本法の改正に伴い，大学にとって社会貢献が重要なミッションとなっているし，高校においても従来の学習中心の活動だけでなく，地域との協働などの新規の取り組みが行われている。

高校と地域の協働プロジェクト型の事業の代表例として，文部科学省によって実施されている「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」がある。これは，地域を支える人材の育成に向けた教育改革を推進することを目的として，高等学校が自治体，高等教育機関，産業界等との協働を行う事業である。この事業のもとで，令和元年度に29都道府県51校が指定を受け，令和２年度には９都県14校が指定を受けている（文部科学省 HP より）。

この事業では，事業の内容から（1）地域魅力型，（2）グローカル型，（3）プロフェッショナル型，という３種類に分類されている。地域魅力型とは，普通科高校を中心に実施されることを念頭に置いており，対象地域ならではの新しい価値を創造する人材を育成することを目的として展開する。２番目のグローカル型とは「Think Global, Act Locally」に対応する，グローバルな視点を持って地域を支えるこれからの地域リーダー人材を育成することを念頭に置いたもので，高校の全学科を対象に実施するこ

とを想定している。最後のプロフェッショナル型とは，専門学科を中心に実施される事業であり，ここでは，高校と地域の産業界が連携・協働することによって実践的な職業教育を推進するものである。

高校と地域が協働する事業については，高校の役割として２つの側面から注目できる。１つ目は，生徒の学習能力を向上させるための仕組みとして働くことが期待される。高校で学習するにあたって，身近な社会問題に取り組むことを意識させることは，学習の動機づけとして有効だと考えられる。それに加えて，昨今の大学入試で評価しようとしている思考力や表現力について，この種の事業に取り組むことで磨かれる能力と関係すると思われている。

もう１つの視点は，地方創生などの地域が抱える課題の解決に向けた試みとしての視点がある。現在の日本では，少子高齢化や地方経済の活性化についてなど，地域の社会問題を多く抱えている。この状況のもとで，地域の若者である高校生を，将来の地域を担う人材として人材育成の機会とすること，そして地域の人材に地域のことをより深く理解してもらうための機会を提供する場としてとらえるものである。さらに，その地域の抱える課題を解決するアイデアを提案する人材とするものである。

このような地域連携型の事業は注目されるが，それに限らず高校の学習プロジェクト的なアプローチにより，類似の取り組みは，指定校以外でも行われている。今回は私が岐阜県の高山市に所在する高山西高等学校（以下，高山西高と略す）での取り組みに参加したことを通じて経験した事を記録すると同時にそこから考察を深める第一歩とするためにこの原稿を残すものである。

2.「探究飛騨」とはどのようなプログラムなのか

2.1.　概要

高山西高は岐阜県高山市に所在しており，飛騨地方唯一の私立高等学校として幅広い層の生徒が集まっている。ここでは，特進Ⅰクラス・特進Ⅱクラス・蛍雪クラスの３つのコースに分かれており，多くの生徒を大学進学から就職までを導く指導を行っている。

高山西高では，岐阜県より「ぎふグローバル人材育成事業（岐阜県版SGH）」の指

定を受けたことを契機として「探究飛騨」という課題探究型学習プログラムを2014年度に開始した。これは１学年60人弱の特進Ｉクラスの生徒を対象に，地元である「飛騨」に関係した課題を自ら設定した上で，自分たちで探究し，情報発信できる人材育成を目指すプログラムである。この点で,「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定校ではないが，地域魅力型とグローカル型の事業と重なる部分を持っている。とはいえ，課題の設定は学生が自分で行うものとなるので，研究は少人数のグループを複数形成して行うことになる。

2.2. スケジュール

では，このプログラムはどのように実施されているのか。このプログラムは高校二年生を中心と中心とした15か月で完了する。最初は，高校一年生の１月に,「探究飛騨」のガイダンスを受け，地域のことを学習する「飛騨学」の説明を受けることに始まる。そして，この時期に上級生の仮発表を見学する。これは，上級生が最終報告前に研究の成果をまとめるために努力している様子を見学することで，自分たちの最終到達点を確認し，自分が選択する研究テーマについて考える契機とする。上級生にとっては，第三者である下級生に向けて仮発表を行うことで，第三者に研究内容を報告することの技術的な困難を実感し，資料の改訂に注力するきっかけとする。

実際に研究活動を開始するのは，高校二年生になってからである。４月から７月までの間に，研究とは何か，そして既存の高校授業と異なる点に注意を受けたうえで，自分で研究テーマの設定を行う。ここでは，高校教員の積極的な働きかけにより，類似の研究テーマを持つ生徒のグループ分けなどを行い，研究チームを形成することが重要な活動となる。

夏休みは研究の土台となる情報収集を行う活動期間として位置付けている。活動内容は研究テーマによって異なる。研究に関係した文献を収集して講読する生徒がいれば、独自のアンケート調査やインタビュー調査を実行する生徒もいる。秋学期が始まると、夏休みに収集したデータをもとに、整理・分析の段階となる。調査データを入力・整理することによって自分たち独自の分析を開始するのである。この時に，追加調査が必要だと判断して，追加調査の検討を行うグループも現れる。もちろん，インタビュー調査など，調査対象の事情を含めて準備を続けるグループも混在することになる。このような段階を経て，単なる「調べ学習」でなく，自らの分析・考察を行う

機会とする。

分析・考察を終えたのちに発表・報告に向けた活動を行う段階に入る。まず，１月の終わりを第一目標として，研究の成果をスライドショーにまとめることを目指す。ここで，研究の流れについての全体像を確認することになる。この時に，第三者に研究成果を伝えるために，資料作成と修正を繰り返す過程が重要なことを実感して，完成に向けた作業を行う。そして，３月に一般公開型の発表を行うことで完了する。発表会では，研究成果を高校生だけでない第三者の参加を交えることで，大人数に向けたプレゼンテーションを経験する。

2.3. 研究テーマの分類

さて，生徒はどのような研究テーマを設定しているのか。長田・小林（2019）によると，生徒の研究テーマは３点に分類されるとしている。まず，飛騨地方の特徴の理解に注力したテーマの選択がある。例として，飛騨の伝統文化に関する研究や，飛騨地方の食材観光産業に関する研究，がある。第２は，飛騨地方に関連した課題であるが，その内容は現代日本の多くの地方が抱える課題であり，飛騨地方の事例研究として取り組んだものである。具体的には，飛騨地方の地域医療に関する研究課題や，飛騨地方の子育て問題に関する課題があげられる。最後は，飛騨地方を題材にしているが，研究の目的は地域課題の解決というより，むしろ生徒にとっての学問的手法の取得が主な目的になっている研究課題である。例えば，地域の食材をいかに売り込むかといった研究には，地域課題に取り組むよりも，生徒にとってのマーケティング理論の習得が主眼となっている。

3. プログラムの作成について

「探究飛騨」における大学の教員として期待される主な役割とは高校生に対して研究に必要な技法を指導することであり，そのために高山西高の授業日程と合わせて調整した結果，前節で紹介したスケジュールが完成した。多くの授業を抱える高校生に対して，限られた時間で研究を実行するためのマネジメントについて考える貴重な体験をした。高校生が実行可能な研究のスケジュールを作成していく事は試行錯誤の連続となった。

実際に大学教員として「探究飛騨」にどのように参加しているのかを以下に記述する。４月から７月の春には研究の意義を学ぶと同時にテーマ設定の重要性について理解を促すための講義を行い，生徒と接する機会を持つことに始まる。夏休みが始まる８月上旬に，調査の重要性を説明すると同時に具体的な調査技法についての指導を行う。この時には，研究の基本は文献調査であることを伝え，先行研究を知ることが研究の出発点となることを伝授する。生徒は研究活動としてアンケート調査やインタビュー調査に対する準備の徹底を促す。

秋以降は，分析・考察を含めて発表を行うことの重要性と第三者に研究内容を伝えるためにはどのような点に注意しなければならないか，について，技術的な点と併せて指導を行う。この時に，大学の夏休み期間中に大学生のグループに参加を促し，各研究グループの相談役として，高校生と交流しながら，研究の進捗をチェックする役割を担う。

１月になると，３月の発表会に向けて，細かい部分に至る指導を行う。ここでは，スライド作成において文字サイズなどの技術的な注意を促すことに始まり，発表のストーリー展開で注意すべき内容について注意を促す。ここで，研究の構造などを改めて伝授することになる。そして，再度，秋に参加した大学生が加わり完成を目ざす。

今回は大学教員としてプログラムの確立に協力できたが，「探究飛騨」の事例を一般化できるかどうかは検討をする必要がある。また，現在の高校教員はすでに多くの業務を抱えていることが多い中，今までの高校教員では決して重視されてこなかった技術を習得することの実現可能性について考慮する必要もある。研究を自ら行う能力と研究を指導する能力はあくまで別である。

教育プログラムを創り上げていくにあたっては，高校生の負担を過重にしないよう考慮する必要があることは言うまでもない。現代の高校生にとって，課題解決に向けた探究型プログラムは負担が多い。生徒が両立するためにはカリキュラムの見直し等，取り組むべき内容は多い。それに加えて，この種の事業は高校の枠組みの下でいかにマネジメントするのかを考える必要がある。

例えば，生徒は多くの場合課題を設定した後，すぐにインタビューやアンケート調査などを行いたがる傾向がある。しかし，実際の調査では，設問の作成等準備に多く時間を取る重要性を強調する必要があることを考慮して，高校の年間スケジュールと

合わせて少しずつ調整することで，先にあげたスケジュールとして定着した。今回は，高山西高の関係者との試行錯誤によって成立することとなった。

4.「探究飛騨」が生徒に与える影響

「探究飛騨」は生徒に対してどのような影響を与えているのか。山本（2018）は，高校生は，通常の授業と異なる研究型の授業を新鮮な取り組みとしてとらえており，積極的に取り組むことによって学習意欲が高まること，この機会が大学等の進路志望に関しても影響を与えたことを指摘している。さらに，高校の教員として，通常の授業では見せなかった生徒の側面を発見し，成長する様子が見られたことが記述されている。

現在の教育において，アクティブラーニングという用語を巷で聞く機会が増えたが，これは，これから身に付ける能力として研究・探索型の能力が注目されていることを意味する。大学では学生による積極的な研究姿勢が求められており，高校の時に経験をすることは有益である。

ただし，いきなり高校生が研究を行うことができるわけではない。そこで，探究飛騨では，高校生に対する身近な先輩としての役割を果たす立場として，大学生にプログラムへの参加を促した。研究を体験する時に身近に相談できる人物がいることは研究を行いやすくする。この点で大学生を高校生と交流することは重要な意味を持つ。この大学生と高校生の交流機会は，高山西高の生徒にとって副次的効果があった。飛騨地方には大学が所在しておらず，ほとんどの高校生にとっては，大学を身近に感じる機会はない。その点で，実際に大学生と意見交換する機会を持つことは，結果として高校生の進路選択に影響を与えた。

なお，大学生と高校生が交流する機会を持つことは，大学生にもメリットがあった。大学生にとって，高校生の研究指導を行うことで，大学で経験している自分の研究の進め方について振り返りができたという声があった。つまり，大学生にとっての各自の研究能力を向上させる機会になったのである。

5. 高校と地域との関係について

高校生が地域の課題に対して研究活動する時に，高校が地域との協力体制を整えることは重要である。なぜなら，高校生にとっては，地域は研究の舞台となるフィールドであると同時に，生活の場でもある。「探究飛騨」の現場では，地元に関係した研究課題を設定しており，多くの生徒が市役所や博物館，商店などを実際に訪問し，問い合わせなど研究の協力をお願いしてきた。これらの研究活動に対して，飛騨地方の各種関係者は，非常に協力的であった。

通常，アンケート調査やインタビュー調査を行う時，希望する形で調査を進められないことをしばしば経験する。「探究飛騨」の場合，私の知る限り，このような事例はほとんどない。

山本（2018）は，高校と地域の視点を中心した関係について指摘している。地域の立場からは，先入観を持たない高校生が地域の課題に対して解決に向けたアイデアを提供する可能性と，高校生に対して地域を担う人材であると意識させる可能性について言及している。この見解は，文部科学省の事業などでも問いかけられている内容と一致する。

大学のない飛騨地方では，地域の高校生が地元のことをよく知り，そこから課題を見つけ問題解決に向けた提案をしていく。場合によっては実際に解決案を実践する活動の担い手となる。この種の活動について着目していく必要がある。

6. プログラムの発展性について

以上，「探究飛騨」を考えるうえでいろいろな立場から考えてきた。高校生にとって研究する機会の活用について，改めて考える必要がある。

第１に研究テーマの設定に関する懸念があげられる。「探究飛騨」では，生徒が自ら地域に関係した研究テーマを選択する。このことはいくつかの課題を持つ可能性がある。自分で研究テーマを設定することは，その課題に基づく研究に責任を持つことになり意欲を高めることにつながる一方で，長期的に見た場合に，研究テーマが似通ってしまい，研究内容も似通ってくる可能性がある。研究の継続性は研究とは何かを学ぶと言う意味では重要であるが，一方で生徒の自分は新しいことを研究したいという

意欲を削ぐ可能性があるからである。このようにならないよう，長期的な展望を考える必要がある。

第２に，高校と地域の協働に関する体制をどのように創っていくかという問題がある。前節で述べた通り，現状の「探究飛騨」では地域の研究に対する協力は上手に得られている。しかしながら，その関係は，高校の教員による属人的な面も多いため，将来にわたって安定しているとは必ずしも言えない。高校と地域が協働するための体制を設計する可能性を考慮する必要がある。生徒が地域に出ていくことが「探究飛騨」では一般化しているがその時に安全性をどのように担保するかとか，地域との関係をどうするかということについて磐石の関係を築く必要がある。

このような地域連携の事例で多く見られることであるが現場に立つ教員個人の才覚に大きく影響を受けることがある。このような点で高山西高等学校がどのようなアプローチをとっているかを私はその決定まで教える立場にないがこの地域との連携のデザインというものは今後の長期間において取り組むのは重要になる。

高校の魅力度を高める事業の事例を見ると，高校と地域をどのように繋ぐのかについて NPO の設立等の事例が見られている。「探究飛騨」の場合，高校教員の個人的な関係などから，ほとんどの調査対象との関係を築くことができているように見受けられる。これは飛騨地方の社会が非常に高校を中心として密着しているからだと推測される。このプログラムを長期継続する事業として目指す場合には，この地域との協働の在り方をデザインする方法を考慮する必要がある。

その他には，指導体制について見直す余地があると思われる。現状では，飛騨地方の特性として大学生が地域に在住していない。大学生の参加が高校生の研究活動に重要な働きをしていることを述べたが，さらなる参加を促す方策を考慮しておく必要がある。

この問題に対する解決策のヒントは，2020年度の「探究飛騨」の体制が参考になる。2020年度は新型コロナ禍のもとで，大学関係者の指導はすべて ZOOM を用いたリモートで行われた。ここで，ZOOM の特性を活用することで，大学生が実際に高山西高の「探究飛騨」の研究の現場に参加する回数が増加する副次的な効果があったことを記しておく。

このことから，将来的には，「探究飛騨」を経験したOBOGによって，研究指導を行う立場で参加することを模索したらどうか。このような卒業生は，自分たちが経験したことを後輩を指導する立場になることで，地域としても地元人材の参加は望ましい。大学生になって地域を離れたとしても，ZOOMなどのツールを用いることによって関わってもらうことは可能ではないだろうか。その点で，「探究飛騨」の長期的な視点の見直しが望まれる。

7. おわりに

今回は，2014年度から関係している高山西高の「探究飛騨」に関する活動を踏まえて，高校と地域の協働について振り返ることができた。ここでは研究指導を行う教員として生徒に対して研究計画をデザインしていくことについて改めて経験を積むことができたことを実感した。最後になるが「探究飛騨」が今後も発展していくことを祈ってならないものである。

参考資料一覧

1．長田進，小林隆徳（2019）探究飛騨から考える高山の学習環境，第一回高山学会発表資料
2．高山西高等学校（2016, 2018, 2019, 2020）ぎふグローバル人材育成推進事業「探究飛騨」研究発表会資料
3．文部科学省HP内　令和２年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」指定校について〈https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1415089_00001.htm〉（最終確認2021.01.15）
4．山本大輔（2018）課題探究型学習「探究飛騨」の導入による変化と課題，中部私学発表